モーストリークラシック '18/12

音楽評論家
東条碩夫の音楽巡礼記

業界でも屈指のコンサートゴアー、日本津々浦々、世界も股にかけた弾丸トラベラー、東条碩夫の内外コンサート高速サーチ。一読でわかるリアルタイムのクラシック現場。

2018年9月

3日(月)
サカリ・オラモがストックホルム・フィルと来日。ベートーヴェンの「運命」、マーラーの「巨人」という超豪腕プロだが、やはり後者での巨大な絵巻物を繰り広げるような演奏がスペクタクルで愉しかった。パワフルなホルン群を含め、オケも巧い(サントリーホール)。

6日(木)
池田香織、金子美香らが歌うワーグナーの簡易型上演(?)のシリーズ、「わ」の会コンサートの第5回は、「ジークフリート」と「マイスタージンガー」などからの抜粋。いつもワーグナーの音楽をピアノで表情豊かに、しかも疲れも見せずに弾いてくれる木下志津子を讃えたい(調布市くすのきホール)。

7日(金)
東京二期会がプッチーニの3部作「外套」「修道女アンジェリカ」「ジャンニ・スキッキ」を23年ぶりに一挙上演。3作を相互に関連させたイメージで仕上げたダミアーノ・ミキエレットの演出とファンティンの舞台装置が洒落ている。同一歌手が2つの作品で歌い、それぞれの人格の共通性もしくは「裏と表」、あるいは運命の巡り合わせといったものを描こうとする手法も面白い。ジョルジェッタとアンジェリカの2役を歌い演じた文屋小百合が光っていた。ベルトラン・ド・ビリー指揮東京フィルも好演。東京二期会のプロダクションとしては近年の傑作だろう(新国立劇場)。

夜はサントリーホールで、山田和樹指揮日本フィルのシーズン開幕定期を聴く。三善晃の「ピアノ協奏曲」(ソロは萩原麻未)、ストコフスキー編曲によるデュカスの「魔法使いの弟子」、デュティユーの「交響曲第2番《ル・ドゥーブル》」など。財政的に苦しい自主運営オケがこれだけ意欲的なプロを組むのだから、見上げたものだ。

8日(土)
トン・コープマンがアムステルダム・バロック管と合唱団を指揮してバッハの「ロ短調ミサ」を上演。深味はあるが、不思議に集中性に不足した演奏。台風21号による旅程変更ゆえの疲れでも?(トリフォニーホール)。

9日(日)
飯森範親指揮の東京響が、ストラヴィンスキーの3大バレエ「火の鳥」(組曲版)、「ペトルーシュカ」「春の祭典」を一挙演奏。力感に富む熱演(ミューザ川崎)。

14日(金)
新日本フィルも上岡敏之の指揮するR・シュトラウス・プロでシーズンを開幕した。「ドン・ファン」、「オーボエ協奏曲」(ソロは古部賢一)、「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」に「死と変容」。上岡の極め付きのプロというべく、特に後半の2曲の演奏は絶品だった(トリフォニーホール)。

15日(土)
高関健の指揮する東京シティ・フィルが、ラヴェルの「スペインの時」を演奏会形式で上演(オペラシティ)。半田美和子、樋口達哉らの好演を含め、高関の極めて劇的な音楽づくりがこの作品を面白く聴かせ、成功を収めていた。

16日(日)、17日(月)
11月の「第10回浜松国際ピアノコンクール」開催に先立ち、過去の優勝者(最高位入賞者を含む)計6人がコンチェルトを弾くという豪華な演奏会が開かれた(アクトシティ浜松)。出演したのはコブリン、ガジェヴ、バックス、ゴルラッチ、ラシュコフスキー、ガヴリリュク。浜松の聴衆に「われわれの街が生んだピアニストたち」を応援するのだという雰囲気が感じられるのは素晴らしい。協演は山下一史指揮の東京響で、ソリストたち各々のキャラクターによく合わせていた。

18日(火)
日本モーツァルト協会の例会で、ジョス・ファン・インマゼールがモーツァルトのソナタやロンドやメヌエットなどを弾いた。遅いテンポの連続、暗い音色、沈潜の極み。既に昔のインマゼールとは全く違う。だがインマゼールは、締め括りのソナタの「トルコ行進曲」で俄然牙を剝いた(東京文化会館小ホール)。

21日(金)、28日(金)
カンブルランが常任指揮者として読売日響を振るのもあとわずか。それを惜しむファンが詰めかけ、演奏者たちも全力で快演を披露。コーストヴェット校訂版によるブルックナーの「第4交響曲」、G・F・ハースの「静物」など珍しいレパートリーも取り上げられた(サントリーホール)。

22日(土)
ひろしまオペラルネッサンスの公演、モーツァルトの「イドメネオ」を、日帰りで観に行く。岩田達宗の演出。八木寿子、小林良子、小玉友里花らが出演。下野竜也の指揮する広島響もいい演奏を聴かせてくれた(アステールプラザ)。

23日(日)
スダーンが東京響を指揮、ハイドンの「軍隊」やベートーヴェンの「田園」を演奏したが、久しぶりの引き締まった、一分の隙もない構築のスダーン節を聴いた感。「田園」での凝ったバランスの精緻な音構築はいつもながら見事だ(ミューザ川崎)。

24日(月)、25日(火)、29日(土)
サイモン・ラトルとロンドン響の日本公演。バーンスタインの「不安の時代」、ヤナーチェクの「シンフォニエッタ」、ヘレン・グライムの新作「織り成された空間」、マーラーの「9番」、シベリウスの「5番」など、多彩なプログラムを披露して行った。ロンドン響を指揮するラトルは、ベルリン・フィル時代と違い、伸び伸びとした解放感をその演奏に漂わせているように感じられる。彼は新しい自由な時代を取り戻したようだ(サントリーホール)。

27日(木)
ジャン=マルク・ルイサダの演奏するショパンの「マズルカ集」と、シューベルトの「ソナタ第21番」を聴く。シャープだけれどもアナログ的な感性と音を持った演奏は、やはり好い(ヤマハホール)。